

## 新学習指導要領に向けての授業実践2

— 近現代の文学作品を入り口にした親しみやすい漢詩・漢文の学習 —

富永 一登 小川 恒男 朝倉 孝之 岡本 恵子  
増田 知子

### 1. はじめに

最近目に入った本研究課題に関わるものとして、次の二点を紹介しよう。いずれも『老子』を引いている。

長谷川宏著『ことばをめぐる哲学の冒険』（毎日新聞社、2008年）は、「愛」「誕生」「亡霊」「平和」「旅」について、古今東西の書物のことばと表現をもとに、思索を深めたものである。第四章「平和」に、「平和の思想は国の権力者や指導者を出所とするものではない。出所は、どんな生きかたであれ生きていることに意味があり、価値がある、とする人びとの日常感覚のうちにある」と記し、その「日常感覚」を記した書物として『老子』第八〇章の全文を挙げる。

小国寡民、什伯の器有りて用ひざらしめ、民をして死を重んじて遠く徙らざらしむ。舟有りと雖も、之に乗る所無く、甲兵有りと雖も、之を陳ぬる所無し。人をして復た繩を結びて之を用ひ、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しましむ。隣国相望み、鶏犬の声相聞こゆるも、民老死に至るまで、相往来せず。

そもそも無為自然の道を説く老子は、無知無欲を是とし、競争意識を持つことを否定する。現代に至るまでの人間の歴史は、より美味しい食を、より良い服を、より快適な住まいを追求することによって成り立っている。老子の考えに拠れば、原始共同社会のままであり続けなければならず、現代社会は存在しなかったことになってしまう。とすれば、老子の思想はとっくの昔に消滅していてもいいはずである。しかし、時に脚光を浴びつつ存在し続けている。現代でも『老子』に関する書物が何冊も刊行されているのは、どうしてなのか。現実の社会と全く相容れないはずの『老子』を教材として、これを考えれば、人間とは何かという根本的な問題に行き着く。その際、長谷川氏の次の文章が大いに参考となる。

老子の理想としたこういう国やこういう暮らしに

現実に還っていくのはむずかしい。が、観念的に、あるいは心情的にそこに還っていくことは、そうむずかしいことではない。そして、そこに還っていかうとすることが、わたしたちの日常感覚の底にある平和へと思いを確かめることにつながる。そういう帰還を可能にするのがことばの力だ。

想像をふくらませ、現実では不可能なことの中から真実を見つけていく、これこそが「ことばの力」であり、国語の学習がもたらす大きな力と言える。

司馬遼太郎著『この国のかたち』（文藝春秋、1990年）の「谷の国」には、『老子』第六章の「谷神は死せず」が引かれ、

谷こそ古日本人にとってめでたき土地だった。……日本社会が谷でできあがったことを思い……日本は二千年来、谷住まいの国だった……将来のことは、よくわからない。谷の国にあって、ひとびとは谷川の水蒸気にまみれてくらしただけに、前掲の「老子」のことばが、詩でも読むように感覚的にわかる。

と記されている。そして、長田弘著『すべてきみに宛てた手紙』（晶文社、2001年）には、次のように記す。

言葉が一つ、胸の底に落ちて、ずっとそこにそのままのこる。物語であれエッセーであれ、つねにおおきなうねりをもつ時間の流れを深くゆっくりとつくりだしながら、不意に、その連続する思いの流れを一瞬断って、重い石を一つ投げるように言葉を一つ、読むものの胸のなかに、司馬遼太郎という人は投げ入れることがしばしばあり、わたしにとって「谷の国」という言葉は、そのように胸に投げ入れられた石の言葉の一つです。

これらは、漢文の言葉から、人間の歴史を振り返り、未来を展望しながら、人間と社会、自分の生き方を考える上で貴重な教材となり得るであろう。二千数百年前の言葉は、朽ち果てることなく今も生き続けている



### 3. 葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」と杜甫「石壕吏」

- I 松戸与三はセメントあけをやっていた。ほかの部分はたいして目立たなかったけれど、頭の毛と鼻の下は、セメントで灰色に覆われていた。
- II ——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器へ石を入れることを仕事にしていました。
- III 松戸与三は、わかかえるような、子供たちの騒ぎを身の回りに覚えた。  
彼は手紙の終わりにある住所と名前を見ながら、茶わんについてあった酒をぐっと一息にあおった。

「セメント樽の中の手紙」を初めて読んだ生徒は非常な衝撃を受ける。これは現実にあったことなのか。それともまったくの空想なのか。ある種の混乱をこの小説は引き起こす力を持っている。

葉山嘉樹（1894～1945）は早稲田予科中退。プロレタリア文学の代表的作家。プロレタリア文学が分裂と解体を繰り返すなかで「文芸戦線」派の有力作家として活躍した。

「セメント樽の中の手紙」は1926年『文芸戦線』に発表された。クラッシャーで粉々にされる恋人という衝撃的なモチーフは、現代の高校生にも当時の労働の過酷さを鮮明に想像させる力を持っている。

小説は、労働者松戸与三の生活を描いたⅠ段、Ⅲ段の間にⅡ段女工の手紙（セメント樽の中の手紙）がはさまれる入れ籠構造になっている。この小説が衝撃的であるのは、女工の手紙が読む者の心を打つからである。恋人が酷い死に方をしたばかりなのに、女工がこのような冷静な手紙を書くのはおかしいと指摘し、これは作り事ではないかと述べた生徒がいた。そうです。言葉が作り出した虚構が小説なのです。肝心なのは、手紙を読んだ与三（あなた）が、この手紙によって心を動かされ、何かが変わったということなのです。その意味で、この小説を読むことは言葉の力を考えることになるのです。

生徒たちにとって労働者という言葉は死語に近い。しかし、この小説のなかで繰り返される「あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私をかわいそうだと思って、お返事ください。」という、労働者として連帯を求める心情は、亡くなった恋人への愛情と相俟って読者（生徒）の心を素直に打つ。

すなわち、この小説を学習する目標は以上の二つである。つまり、

- ①小説を読む楽しみを意識する。
- ②現代に繋がる人間疎外の状況を、時代的な背景を理解し、日々を生きる人間の視点から考える。

授業で使われる人間疎外という言葉は抽象的で実感が乏しい。ニュースや新聞で見聞きする状況は、必ずしも人々が幸福に暮らす姿ばかりではない。格差社会という言葉は、高度情報化社会やグローバル社会と同じ位相ですっかり定着した感がある。そのすべてが競争社会を前提としていることに人々はどこまで気がついているのだろうか。競争社会が当然であり、社会的弱者が生まれるのが社会のあり方として当然なのだろうか。プロレタリア文学という時代的制約を超えた言葉の魅力が「セメント樽の中の手紙」にはある。

「セメント樽の中の手紙」は労働者の苦悩と連帯を女工の手紙が語り手となって紡ぎ出した小説である。

人民の苦しみを文学として表出するのは、中国文学の伝統でもある。古くは詩経（『碩鼠』）に見られるように、人民の苦しみの多くは為政者によってもたらされる。

厳しい政治批判・社会批判をした詩人に杜甫がいる。杜甫は贅沢な暮らしをする高官の生活が、人民の苦しみの上になりたっていることを深く認識していた。戦争や貧困などの社会の矛盾に人民が苦しむ姿を杜甫はいくつかの社会詩にしている。「三離三別」（「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」「新婚別」「垂老別」「無家別」）は、乾元二年（759）、戦乱の中、洛陽の東鞏県から華州へ帰る途中に見聞した人民の姿をを描いた詩である。その中から「石壕吏」を取り上げる。

暮投石壕村	暮れに石壕の村に投ず
有吏夜捉人	吏有り 夜 人を捉ふ
老翁踰牆走	老翁 牆を踰えて走り
老婦出門看	老婦 門を出でて看る
吏呼一何怒	吏の呼ぶこと 一に何ぞ怒れる
婦啼一何苦	婦の啼くこと 一に何ぞ苦しき
聽婦前致詞	婦の前みて詞を致すを聴くに
三男鄴城戍	三男 鄴城に戍る
一男附書至	一男 書を附して至る
二男新戰死	二男 新たに戰死すと
存者且偷生	存する者は 且く生を偷むも
死者長已矣	死する者は 長く已みぬ
室中更無人	室中 更に人無く
惟有乳下孫	惟だ乳下の孫有るのみ
孫有母未去	孫には母の未だ去らざる有るも
出入無完裙	出入に完裙無し
老嫗力雖衰	老嫗 力衰ふと雖も
請從吏夜歸	請ふ 吏に従ひて夜歸せん
急應河陽役	急ぎ河陽の役に應ぜば
猶得備晨炊	猶ほ晨炊に備ふるを得んと
夜久語聲絕	夜久しくして語聲絶え

如聞泣幽咽	泣きて幽咽するを聞くがごとし
天明登前途	天明 前途に登らんとして
独与老翁別	独り老翁と別る

杜甫が石壕の村で見たものは、老人までも徴兵しようとする現実であった。この現実を語るのは老婆の言葉である。そこにはこの一家の現実が語られる。

三人の息子は、鄴城の戦に出て行きました。息子の一人が手紙をことづけて申しますには、他の二人の息子は近ごろ戦死しました。

家の中にはもう男はいません。乳離れしない孫がいるだけです。孫にはその母親がまだいますが、出入りに満足なスカートありません。このばばは力は衰えています。お役人さまにお供して今夜すぐに行きましょう。急いで河陽の仕事場に行けば朝の炊事には間に合いましょう。

老婆の話は、ここで終わる。夜が明けて再び旅路についた杜甫はじいさんとだけ別れを告げた。杜甫は主観を交えず、見聞きした人民の現実を述べる。

#### ○授業構想

文学の力は言葉の力である。では、文学は言葉で何を描こうとするのか。そして言語による表現はどこまで可能なのか。「言不尽意」「言尽意」の論争が想起されるが、今回取り上げた「セメント樽の中の手紙」と「石壕吏」は、作家・詩人が表現したのは状況の中で生きる人民の姿である。この二つの作品を重ねて以下のように、授業を構想する。

A 「セメント樽の中の手紙」

B 「石壕吏」

#### 1. AとBに描かれているのは何か。(内容)

- ・ミニマムストーリーを作る。
- ・印象に残った表現を挙げる。

この二点から切り込む。

Aでは、「わたしの恋人は破砕器へ石を入れることを仕事にしていました。そして十月七日の朝、大きな石を入れるときに、その石といっしょに、クラッシャーへはまりました。」「あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私をかわいそうだと思って、お返事ください。」「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」など、構成ともからめて考えさせる。

#### 2. AとBの表現形は何か。(表現)

#### 3. AとBの構成はどのようになっているか。(構成)

Aは小説、Bは五言古詩。

共に入れ籠の構造を持ち、Aでは女工の手紙が、Bでは老婆の語り言葉の力を十分発揮している

ことを理解させる。

#### 4. AとBをどのようにあなたはとらえるか。

#### 5. AとBは現代とどのようにつながるか。

言葉を扱う者が人間の生きる社会とどのように向かい合うのかそれを誠実に追求したのがこの二つの作品である。「セメント樽の中の手紙」はプロレタリア文学というレッテルを外した方が読みの可能性が広がる。与三の時代とは形を変えた悲惨さが現代の労働者にもあることは、少し目を凝らして、耳を澄ませばわかる。しかし、今、あの女工のようにまっすぐ恋人への愛を語ったり、おなじ労働者だからと連帯を求めたりできるのだろうか。また、杜甫が8世紀に描いた戦争に痛めつけられる人民の姿を私たちは決して過去のものとして読み過ごすことはできない。「セメント樽の中の手紙」と「石壕吏」の言葉が、すぐれて現代的な問題を表出していることはいままでもない。

(朝倉孝之)

#### 4. 八木重吉「陽二よ」詩と陶潜「責子」詩

##### 陽二よ

なんという いたずらっ児だ  
陽二 おまえは 豚のようなやつだ  
ときどき うっちゃりたくなる  
でも陽二よ  
お父さんはおまえのためにいつでも命をなげだすよ

##### 責子

白髪被両鬢	白髪 両鬢を被ひ
肌膚不復実	肌膚 復た実たず
雖有五男兒	五男兒有りとも雖も
総不好紙筆	総て紙筆を好まず
阿舒已二八	阿舒は 已に二八
懶惰故無匹	懶惰 故より匹ひ無し
阿宣行志学	阿宣は 行ゆく志学
而不愛文術	而も文術を愛せず
雍端年十三	雍・端は 年十三
不識六与七	六と七とを識らず
通子垂九齡	通子は 九齡に垂んとして
但覓梨与栗	但だ梨と栗とを覓むるのみ
天運苟如此	天運 苟しくも此くのごとくんば
且進杯中物	且く杯中の物を進めん

#### 教材観

時を超えて変わらぬものは親子の情愛であろう。

陶潜は東晋の末365年生、幼くして父と死別した。世のために働きたいという情熱はあるものの世渡りの拙さから早々に辞職、帰郷する。「桃花源記」は多くの教科書に採られ、世界史の資料集等で「帰去来辞」「帰

田園居」を目にしたという生徒も多い。後の文人に大きな影響を与え、日本で最も愛された詩人のひとりでもある。この「責子」詩は五言古詩という形式もあってか、教科書では高校2年または3年を対象である。

自身の老いを意識するにつれ、気になるのは息子たちのこと。五人もいればそれなりに頼りになりそうなものを、そろいもそろって出来が悪い。まあこれも天運、酒でも飲むか……。

「責子」という詩題にドキリとさせられる生徒は少なくない。それでも以前は読解し、繰り返し読むうちに、多くの生徒が割とすんなりと、息子たちの行く末を案じる父の愛情とそれなりの自足感を讀み取ったものである。そして中に必ず、この詩が好きだと言ったり、自分だったらその「父」と一緒に酒を飲むよとニヤリ笑う生徒がいた。ところが近年、それがなかなか難しい。

詩は、1、2句で老いの実感を詠い、3～12句で五人の息子はみんな勉強嫌いだがその五人というのはこんな風だと一人ひとりについて述べ、最後の13、14句で気持ちに一区切りつけるのである。

近年気になるのは、この詩のどこに愛情が述べられているのか、と聞く生徒である。他の生徒たちが「愛情」に気づいて発言するのを聞きながら、納得がいかないというのだ。

ケータイ小説に限った話ではないが、今子どもたちが読む作品には直截的な心情説明が溢れている。親子関係も変わってきた。高校生に父親の気持ち、酒を飲む気持ちが分からないのも当然だ、という声もある。

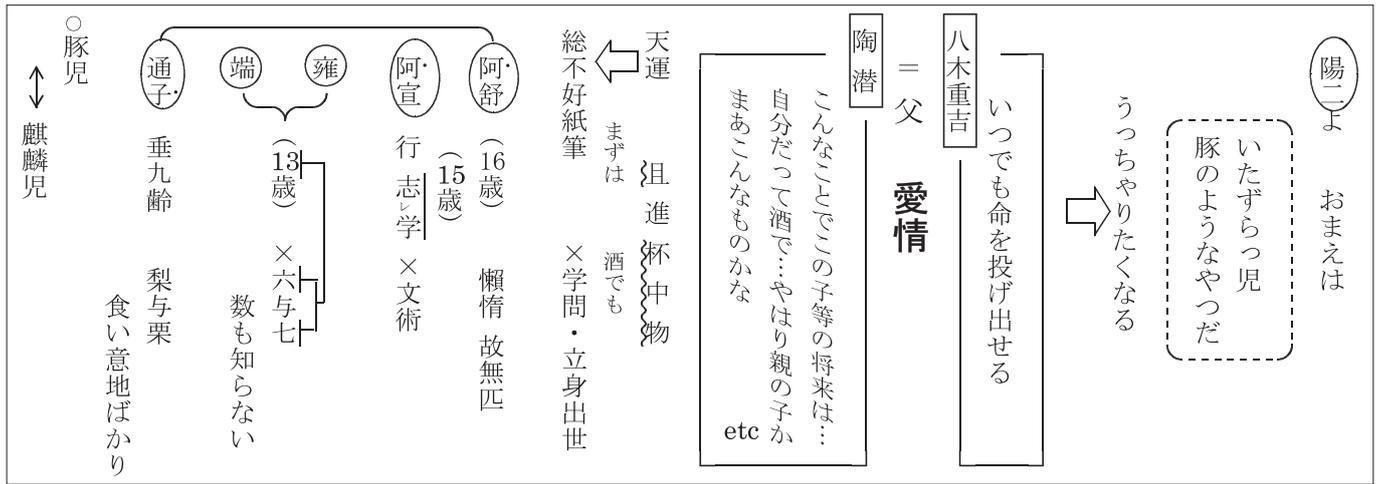
そこで現代の詩を架け橋にしてはどうだろう。父が息子を思う気持ちは時代を超えて響きあい、対照する中で読み取りを深めることができるのではないかと考えた。

八木重吉は1898（明治31）年に生まれ、英語教師として勤務しながら詩作に励んだ。17歳で結婚、25歳で長女桃子、27歳で長男陽二が誕生。しかしその翌年肺結核に罹った重吉は、1927（昭和2）年29歳の若さで妻と二人の子を遺して死去したのである。

したがって、この詩の息子はまだほんとうに幼く、作者にも老境の感慨などありはすまい。だが、これもやはりよい詩ではないか。他の現代詩人は、娘への慈愛あふれた作品に対して息子への思いは重く、己の桎梏でもあるかのように屈折したものが多い。それに比して、この詩からは曇りのない愛情が素直に読める。同時に陶潜の詩と、どこか似通ったものを感じさせはしまいか。なお、重吉はこの詩に並べて「桃子へ」と姉にも同様の詩を与えているがここでは触れない。

つぎに、両詩を比較した学習を記することとする。

指導上の留意点	学習活動
<p>1) 八木重吉「陽二よ」を読み、詩の主題を確認する。 2) 両詩の共通点から心情を考える。</p> <p>1. 父として、それぞれの息子をどのように評価しているか、読み取る。 ①「いたずらっ児」「豚のようなやつ」からどのような息子像が浮かぶか、考える。 ②「五男児」はそれぞれどのような息子か、読み取る。</p> <p>2. 一人ひとり名前を呼んでいることについて考える。 ①「陽二よ」「陽二 おまえは」「でも 陽二よ」に込められた気持ちを考える。 ②「五男児」を一人ひとりどのような気持ちで呼んでいるか考える。</p> <p>3. 言葉の調子について考える。 ①「責子」詩から、言葉遊びのような表現や大げさな表現を探し、その効果を考える。 ②①をふまえて、二つの詩に似た雰囲気表現はないか考える。</p> <p>4. 陶潜の心情を考える。</p> <p>3) 二人の父親の愛情表現についてどう思うか、感想を話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな印象を受けたか、感想を発表させる。</li> <li>・詩の主題を確認させておく。</li> <li>・予め、陶潜「責子」詩について、作者、詩形、押韻を簡単におさえ、訓読の練習をさせておく。</li> <li>・息子に手を焼いている様子を読み取らせる。</li> <li>・「豚児」の語を紹介し、「麒麟児」と合わせて辞書で確認させる。</li> <li>・二句毎に、一人ひとりの評価を確認させる。</li> <li>・第4句「総不好紙筆」ではなぜ困るかに気づかせる。</li> <li>・それぞれどのような気持ちで呼んでいるか、考えさせる。</li> <li>・短い詩の中で繰り返し名前を呼ぶ理由を考えさせる。</li> <li>・すべて幼名で呼んでいること、「阿」「子」の意味を確認させる</li> <li>・文字を丁寧に押さえさせる。</li> <li>・「年十三」と「不識六与七」等に気づかせることで、厳しく深刻にあげつらっているわけではないことを理解させる。</li> <li>・「懶惰故無匹」に「なんという いたずらっ児だ」を対照させるなど、自由に挙げさせる。</li> <li>・「苟」「且」の確認。・音読</li> <li>・全体をふまえて最後の2句に込められた心情を考えさせる。</li> <li>・両詩を音読</li> </ul>



(岡本恵子)

### 5. おわりに

昨年度の研究を承けて今年度は、具体的な教材化を試みた。多様な方向性がある中、今年度提示するに当たって留意したのは以下の点である。

① 教科書教材または教科書教材と関わりがあること

学習指導要領の改訂で、古典に関する指導の重視が打ち出されても、直ちに授業時数が増加するものでもない。シラバスに縛られる現場で投げ入れ教材を徒に増やすことができない以上、まず教科書教材を生かす方向で考え、朝倉は、「国語総合」所収の「セメント樽の中の手紙」と「古典」所収の「石壕吏」の組み合わせを、岡本は「古典」所収の「責子」を取りあげることにした。

② 国語科の学習として位置づけられること

文学の力はまさしく言葉の力である。言葉を丁寧に読み、言葉で深く考えることがやはり「国語」の根幹であろう。唐代に書かれたものがなお、時代を超えて現代的な問題を表出していること、六朝に書かれたものがなお人間の真情を写して心に響くこと、そうした人間の普遍は、古典と現代を付き合わせたときに最も効果的に感得できるのではなからうか。

③ 暗唱可能な分量の漢文教材であること

繰り返し音読できる分量の作品であれば、内容理解が深まるにつれて自ずから親しむことができよう。生きた言葉の力を実感しながら文語に親しむ中で、言語感覚を養わせたいものである。

とはいえ、必ずしも教科書教材に縛られる必要はな

い。今こそ取りあげるべき作品（の組み合わせ）は何か、そこに示唆を与えるのが富永、小川の考察である。

富永は、ともに『老子』を引いた長谷川宏『ことばをめぐる哲学の冒険』と司馬遼太郎『この国のかたち』を紹介する。前者では『老子』の「小国寡民」が持つ現代的課題から国語学習への繋がりを次のように述べる。無為自然の道を説く老子は、無知無欲を是とし、競争意識を否定する。しかし人間の歴史は欲望の追求であり、老子の説く思想とはほど遠い。その思想はとうに滅んでもよいものなのに、滅んではない。なぜか。それは想像をふくらませ、現実では不可能なことから真実を見つけていくことを『老子』が可能にするからである。そして、これこそが「ことばの力」であり、国語の学習に繋がるのである。

次に文字に着目し、小川は「山月記」を次のように読み解く。「文字禍」と同時に発表された「山月記」で、李徴を虎にしてしまうのも、やはり「文字の霊」ではなかったか。後世に伝録せんとする力をことばが持つ故に李徴は詩に執着したのだと。そこから読書の世界は現代作家の宮城谷昌光と酒見賢一の作品を引いて、漢字が備えているイメージ喚起力へ言及し、それを解放するために漢文教育の担う役割を指摘する。

来年度は、中・高校生が日常の生活や学校生活で触れる機会の多いであろう、あるいは触れてほしい近代の文学作品と漢文世界を結んでの授業実践に取り組みたい。(朝倉孝之、岡本恵子)